

(Living In The)
Perfect World

忍者小僧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、校庭の片隅でおかしな儀式をしている可愛い女の子と出会った。

自称墮天使のその子は津島善子。成り行き上、儀式に巻き込まれてしまう。

最初は変な奴だと思っていたのだが、徐々に彼女の魅力に惹かれていく……。しかし……。

※ヨハネが沼津の中学に通っていたころの設定のお話です。

目次

i c W o r l d ①	—	(L i v i n g I n T h e) M a g	f e c t W o r l d	—	(L i v i n g I n T h e) P e r
37			1		

(Living In The) Perfect World

俺と彼女の出会いはロクでもなかった。

ある日の放課後、俺が学校の校庭のベンチでぼんやりしていると、唐突に女の子がタペストリーのような物を広げだした。

「おいおい、何やってんだよ」

俺がびつくりして尋ねると、女の子が言った。

「今から儀式をやるの。丁度いいわ。手伝いなさい」

「儀式？」

「そうよ。悪魔を呼び出すの」

「なんだよそりゃ」

俺はあきれ顔になった。

クラスには、占いだとか、タロットカードだとか、そんなんにはまってる女子はちらほらいる。

けれども、おまじないレベルだ。

こんな本格的なタペストリーを広げているのは見たことがない。

「どこで買ったんだ、これ。本物の綴れ織りじゃん」

「トルコ製よ」

「答えになつてねえ」

「デパートのセールでママに買ってもらったの」

「意外に普通だな」

そんな会話をしている間にも、せっせと準備は進む。

校庭の片隅にタペストリーを広げ、四つ隅に蠟燭を立てようとしている。

「ほら。そっち押さえて」

「へいへい」

かったるい声を出しつつ、手伝うことに。

理由は単純だ。

変なヤツだが、可愛かったからだ、顔が。

「ここ」。ちゃんと押さえながら置かないと、倒れちゃうの」

「あ、ああ……」

言われるままにタペストリーの端を手で伸ばして平らにすると、女の子がそこに蠟燭を固定した。

長い黒髪が、さらつと風に揺れて、俺の鼻孔をくすぐる。

俺はドキドキした。

「そ、それで。これをどうするんだ」

「準備ができたから、呪文の詠唱を始めるわ」

「呪文？」

「そうよ！ これは、天から舞い降りてきた、私だけに赦されたスペル」

力強く言い放ち、独特のポーズを決める。

「漆黒の闇を切り裂きし墮天使よ、汝の力を解放したまえ。いでよ、リトルデーモン！」

墮天使なのかりトルデーモンなのかどっちだよ。

心の中で突っ込みを入れていると、女の子がポケットからライターを取り出した。

「聖なる炎！」

掛け声とともに着火。

手慣れた動作で、蠟燭に火をつけていく。

「お、怒られねーのか？ 火を使っちゃダメだろ」

「大丈夫よ」

平然と蠟燭に点火すると、もう一度ポーズを決める。

「風よ、吹け！」

「ごおおおおお!!

その時、本当に風が吹いた。

え、まじで?

俺は驚いて女の子を見つめる。

ヤツは、ドヤ顔でサムズアップ。

だが、直後、その表情は悲惨なものになった。

「あ、ああああ、風で蠟燭が!」

「大惨事じゃねーか!」

慌てて倒れた蠟燭を立てようとする。

が、熱い。

触れねえ。

「あ、ヤバい。タペストリーから焦げ臭いにおいが!」

焦げてるじゃねーか!

「こらあ! お前ら、そこで何をやってる!」

あたふたする俺たちの背中に、野太い声が投げかけられた。

振り向くと生活指導の谷口先生だった。

※

「火を使つて遊ぶなど言っているだろ！」

生活指導室に呼び出された俺と女の子は、起立の状態で谷口に怒鳴られた。

「遊んでるんじゃないもん。ちゃんとした儀式だもん」

言わなくていい反論を女の子がするが。

「ああん!？」

「ひいつ！」

睨まれるとすぐに黙った。

弱いな、おい。

「とにかく。火は、取り扱いを一步間違えば、命を失うことすらありうるんだ。以後、絶

対に気をつけろ。子供の遊びに使つていいものじゃない」

「はい」

俺は頭を下げた。

こういうときは慇懃な態度を見せておくに限る。

しかし、女の子はまだふくれっ面をしている。

俺は彼女の頭を叩いて、無理やりお辞儀させた。

生活指導室を出て行く時、谷口先生が言った。

「儀式だか何だか知らんが。夢を見ておくのもたいがいしておけよ。もう中学生だ

ぞ。現実の社会をちゃんと見ろ」

※

「なによっ！ あの言い草！」

廊下で女の子が叫ぶ。

俺はため息をついた。

「しようがないだろ。実際、火を使ったら危ないんだから。ムカつくけど谷口が言うてることは正しいよ」

「そうじゃなくって！」

「なんだよ」

「遊びだとか、夢を見てるだとか。そこがムカつくの」

「あっそ」

俺はカバンの中を手探る。

「ま、俺はこれが見つかんなくてよかったよ。取り上げられたらえらいことだった」

アイポッドを取り出した。

「あ。学校に持って着たらダメなヤツ」

「ああ」

「校則違反だ」

「お前に言われたくはないな」

「なに聞いてたの？」

「んー？ これ」

止まっていたところから再生する。

古い洋楽のヒット曲。

兄貴からもらったのだ。

「あ。そうだ。この曲のタイトル、お前にぴったりじゃん」

「《悪魔を憐れむ歌》？」

「だってお前、堕天使を探してるんだろ？」

「私が堕天使なの！」

「知らんがな、そんな設定」

「設定言うな！」

ともあれ、ちよつと興味を覚えたみたいだ。

「私も聴いていい？」

「いいよ」

俺たちは、一つのアイポッドのイヤホンを分けて、放課後の廊下で音楽を聴く。

さつきと同じ、心地よい風が吹いた。

ひどく心地が良い瞬間だった。

「ふうん」

曲が終わると、女の子がイヤホンを返してきた。

「どうだった？」

「よくわからないわ。洋楽のロックなんてふだん聞かないもの」

「今度、他のも聴かせてあげようか？」

「たとえば？」

「うーん。J・ガイルス・バンドの《堕ちた天使》とか？ まんまなタイトルだし」

「なにそれ！ 聴きたい！」

「今度貸してやるよ」

そう言って別れてから、名前を聞くのを忘れていたことに気がついた。

「しまった！ 俺は馬鹿かよ」

俺は頭を掻いた。

しかし、彼女の名前は翌日、簡単に判明した。

結構有名人だったからだ。

「ああ、儀式してるヤツね。津島善子だろ。通称ヨハネちゃん」

クラスの情報通に問いかけると、すぐに答えが返ってきた。

津島善子か。

結構普通な名前だな。

「つてか。ヨハネってなんだよ」

「なんか、自分でそう名乗ってんだよ。ヤバイよな。ヨハネって呼ばなきや怒るらしいぜ」

「マジで」

「俺の彼女が同じクラスだから。そう言ってた」

「え。お前、彼女いたの」

「去年からな」

俺は妙な負けた感を抱きつつ、言った。

「その津島さんって何組？」

「B組」

「へえ」

「何だよ、お前、気になってんのか？」

「ああ、いや……その」

「やめとけつて。顔は可愛いけど、残念粹だ」

ひどい言い草に少し腹を立てながら、席に戻った。

するとちようど授業開始のチャイムが鳴った。

また退屈な時間が始まる。

俺はノートを広げ、歴史の授業の板書をしながら、ぼんやりと昨日のことを考えていた。

荒唐無稽なバカバカしい儀式。

あんなことしたつて無意味だ。

俺たちみたいな一般人が、墮天使になんかなれるわけがない。

だが、妙に楽しかった。

放課後になると、昨日と同じベンチに向かった。

もしかしたら、津島さんがまたやってくるかもしれないと思ったからだ。

だが、しばらくぼんやりとしていたが、彼女は現れなかった。

そりやそうか。

昨日怒られたところだもんな。

同じことをやるわけがない。

俺は頭を掻いて、ベンチから立ち上がった。

無駄な時間をすごしてしまった。

帰ろうと思い、校庭を歩いていると、なにやら騒がしい一角が目にとまった。

校庭の隅の池の辺りだ。

なんだ？と思つて目を凝らすと。

津島さんがいた。

昨日のタペストリーを抱えて、ずぶ濡れで教師ともめている。

……前言撤回だ。

津島さんは一度怒られた程度で懲りる人じゃないらしい。

俺は池のほうに向けて走り出した。

「なにやってんの」

「あつ。昨日の男の子」

俺がたどり着くと、津島さんの表情がぱあつと明るくなった。

「友達か？」

こわもての教師が問いかけてくる。

「あ、えつと。まあ」

俺は曖昧に答える。

すると一瞬、津島さんの表情が翳つたような気がした。

俺は勇気を出して言い直した。

「いえ、その。友達です」

教師がため息をついた。

「だったら、お前からも注意してやってくれ。唐突にこの敷物みたいなのを池に浮かべようとしたんだ」

「池に？」

俺が津島さんを見ると、彼女は力いっぱい頷いた。

「昨日は火の儀式で失敗したから、今日は水の儀式にチャレンジしたの」

悪びれもせずにそう言い放つ。

「それでずぶ濡れなわけ？ 水に浮かべただけでどうしてそうなるんだよ」

「上に乗ろうと思ったからよ」

「おい」

水に浮かべたタペストリーに乗るって、忍者でも無理だろ。

「それで池に落ちたってわけか」

「まあ、その。そういうことね……」

呆れ顔の俺と教師に、津島さんはドヤ顔でポーズを決める。

「でも、前は2秒も持たなかったのに、今日は3秒ほど沈まなかったわ。わが魔力は増幅しているー！」

※

そのあと、昨日と同じように生活指導室に連れて行かれ、またこつてりと絞られた。デジャヴ感のある雰囲気、放課後の廊下を二人とぼとぼと歩く。

「ねえ」

「なんだよ」

「どうして今日も一緒に怒られてくれたの？」

「どうしてって？」

「だって。昨日はともかく、今日はあなた、関係ないのに」

「まあ、成り行きだよ」

俺は笑った。

「ちよつと、津島さんを応援したくなつてね」

「あ。私の名前知ってるんだ」

「まあね」

「もともと知ってたの？」

「いや。今日クラスメイトに訊いた。そいつの彼女が君と同じクラスなんだってさ」

「ふうん……」

と、津島さんの表情が浮かないものに変わった。

「どうしたの」

「別に。ただのその。いろいろ聞いたのになって」

「ヨハネとか?」

「笑うな!」

「笑ってないよ」

「絶対うそ」

「うそじゃない」

俺は津島さんをじっと見つめる。

「な、何?」

「いや。むしろ良いと思ったから」

「へ?」

津島さんが、間抜けなほどきよとんとした表情をした。

「俺もさ。なんとなく思うんだ。こう、自分以外の何者かになりたいとかさ、俺って本当はもつとすごいんじゃないかとか。だから、善子じゃなくてヨハネって、まあその、わかるよ」

「お、おおお……」

すごい目をキラキラさせた津島さんが、俺の手を取った。

「きよ、今日からあなたのことをわが第一の眷属とするわ! ええと……」

俺は苦笑した。

そういえば、まだ名前さえ教えていなかった。

「祐二。笠井祐二だよ」

「なるほど。では。あなたには……そうね。地獄の番犬ケルベロスという真名を与えましょう！」

「どういう文脈でそんなあだ名になるんだよ！ 普通に祐二って呼んでくれ」

「ええ〜？」

「頼むよ。女の子に下の名前と呼ばれるのとか、夢なんだ」

「しょ、しょうがないわね……えっと、その……ゆ、ゆ……」

津島さんが真っ赤になって「ゆ」を連発する。

なんかその様子が可愛い。

「ゆ、ゆ、ゆ、ユグドラシル！」

「違う！」

思わず突っ込みを入れる。

「ユークリッド係数！」

「それも違う！」

「ユージン・オーマンデイ！」

「それ指揮者！」

結局その日、祐二君と呼んでもらえるまで30分かかってしまった。

※

以来、都合がつけば儀式に付き合うようになった。

クラスメイトにはときどき笑われたりからかわれたりするようになったが、特に気にならなかった。

もともと、そんなにたいして友達が多いほうでもない。

いまさら失うものがあるとは思えなかった。

そんなことよりも、津島さんと仲良くなれたことのほうが嬉しい。

今のこの、俺と津島さんの世界。

それが、完全な世界だと思えた。

あ、ちなみに、《堕ちた天使》の音源は結局、貸さなかった。

兄貴に聞いてみたら「やめとけ。あれはエツチな歌だぞ」と言われたからだ。

「例の曲、聴きたいんだけど」

という津島さんに、兄貴の言葉そのままに

「ごめん。エツチな歌だった」

と答えたら、顔を真っ赤にしてそれ以上ねだってこなかった。

可愛いやつめ。

ある日。

俺は前から津島さんに提案したかったことがあったので、それを言ってみた。

「あのさ。外で儀式してたら、すぐ先生とかに怒られちゃうでしょ」

「そうなのよね。なんとかならないものかしら。かといって家の中で一人でやってもつまらないし」

津島さんが、ため息をつく。

「そこでさ、ちよつとしたアイデアがあるんだけど」

「アイデア？」

「そう。パソコンを使って、動画配信したらどうかかな？」

「動画配信？」

「兄貴の友達がさ。なんかそういうのやってて。こう、固定カメラ置いてさ、その前で儀式とかするんだよ。それだったら部屋の中でもできるし。いろんな人に見てもらえるから、予言とかを信者に伝えるような気分を味わえると思うよ」

「予言……信者……」

津島さんの表情が、見る見るうちに夢見る笑顔へと変わっていく。

きつと、自分が民衆に託言を告げる預言者になった像を想像しているのだろう。

「面白そう！ やりましょう！」

がぼつと体を乗り出して、津島さんが俺の手を握った。

「あ、ああ」

暖かい。

津島さん、手の体温高いな。

俺はかなりドキドキした。

照れ隠しのように目をそらして、問いかける。

「そ、そのためには、まず環境を整えなきゃね。家にパソコンある？」

「親のお古のノートパソコンがあるわ」

「じゃ、大丈夫だね。それって、内蔵カメラついてるタイプかな？」

「えっと……ついてなかったかも」

「それじゃ、ウェブカメラだけ買いにいこっか」

「ええ！」

その日は休日だった。

俺たちは、沼津の繁華街の電気屋さんへ。

もしかして高かったらどうしようと思っただけだけど、意外に安いウェブカメラは2000円ぐらいで売っていた。

これなら小遣いでも買える。

まあ、今月は漫画とか買うの我慢するか。

「これなら大丈夫だね。言いだしつべだし、俺もちよつと出資するよ……つて、どっち向いてるのさー！」

津島さんは、在庫処分品のカートに並べられたへんてこなストラップに見入っていた。

「これ……素敵ね」

「どこがだよ」

それはやたらと顔色の悪い犬のストラップ。

「こう、呪われてそうな表情してるじゃない」

「まあ、確かにね」

「決めたわ。これも一緒に買うー！」

ウエブカメラと一緒に、気持ちの悪いストラップを店主に差し出す。

店主がストラップを見て、「やっと売れたかあ」という表情をした。

なんで仕入れたんだよ。

店を出ると、津島さんが俺にストラップを手渡してきた。

「え。なに？」

「プレゼント」

「なんで？」

「だってあなたに、私の眷属になった証を何も与えていなかったもの」

俺は苦笑いしながらストラップを受け取った。

でもまあ、嬉しかった。

気持ち悪いストラップでも、女の子からもらえるところに嬉しいものだとは。

俺はどこかうきうきした気分で、意気揚々と歩く。

やがて、津島さんの家にたどり着いた。

「上がって？」

「え!? いいの?」

「そりやそうでしょ。だって、教えてくれなきや、動画配信なんて上手くできないもの」

「あ、そっか。それじゃ、その。おじゃまします」

俺はかなり緊張しながら、彼女の家の敷居をまたいだ。

女の子の家に遊びに行くなんて、小学校の低学年以来だ。

「あら。お友達？」

「うひゃっ！」

即効でお母さんと遭遇。

俺は飛び上がった。

「ちよつと。驚きすぎ」

「あ、いや、その。ごめん」

津島さんにジト目で見られて、俺はあわてて頭を下げる。

「」。こんにちわ」

「はい。こんにちわ」

お母さんも頭を下げた。

なんとも微妙な空気だ。

津島さんのお母さんは、スタイルがよくて綺麗な人だった。

津島さんも大人になったらこんな風になるんだろうか。

そう考えると少しドキツとした。

「えつと。仲良くしてあげてね」

お母さんが、俺にそう言った。

「あ、はい」

「もう。行くわよ」

津島さんが、催促するように俺に言った。

もう階段を半分上っている。

俺はあわてて後を追った。

※

「ノートパソコンをこのぐらいの位置において……」

自室で、動画配信の準備をする津島さんを横目で追いながら、俺はお母さんのことを考えていた。

さっきのあの、微妙な表情。

そこには、唐突にやってきた俺に対してではなく、津島さんに対する感情も混じっていたような気がした。

母親からしたら、魔術だ、堕天使だ、と言っている娘に対して、もしかしたら複雑な感情があるのかもしれない。

確かに……心配になる気持ちは……わかる。

『何者でもないぼくら』であることに、必死であがなおうとしてるところが、津島さんの魅力なんだけど。

俺は、そこに惹かれてるんだだけど。

だけど、もしかして、それを続けていることで、津島さんが不幸になっているとしたら？

俺は、津島さんに声をかけようとした。

けれども、なんと行っていいのかわからなくなった。

「あの……」

「なあに？ 祐二くん」

ウェブカメラをノートパソコンに取り付けようとしている津島さんが振り向いた。

「あつ」

そのポーズだと、ちょうど突き出したお尻のスカートが、めくれ上がりそうになっていた。

み、見えそうだ。

俺は、頬を赤くして言った。

「そ、その。スカートが……」

「えっ!!」

津島さんがあわててお尻を抑える。

「み、見えた？ 見えちゃったの？」

「見えてない、見えてないよ」

「ほんと？ ほんとにほんとね？」

「本当だよ」

そのまま、俺が本当に言いたかったことはうやむやになってしまった。

※

その日、初めてのウエブ配信に挑戦したが、結果は散々だった。特段何をするか決めずに始めてしまったせいだろう。

「え、えと、その」

カメラのスイッチを入れると、戸惑ったような雰囲気津島さんが、しどろもどろ、つぶやく。

「あ、その。わ、私は……えと、だ、墮天使……ヨハネ、です」

「もつといつも通り、大胆不敵に！」

「つていわれても、無理〜！」

そんなことを繰り返して、3度目ぐらいには、ようやくいつもの津島さんらしく、大見得を切る事ができた。

「私は、魔に魅入られし天使。漆黒の墮天使、ヨハネ！ さあ一緒に墮天しましょ！」
しかし。

「えつと、このあと、なにをすればいいの？」

「またもや、失敗である。」

「あわててカメラのスイッチを切る。」

「俺はため息をついて、言った。」

「ごめん。何やるか決めとかなきゃダメだったね。コンテンツの構成をしなきゃ」
「そ、そうね」

「なんか、やりたいことある？」

「そうね……儀式の再現とか、占いとか？」

「あ、いいね。占いとか、本格的な雰囲気のをやると、人気出るかも」

「それじゃ、用意しましょ！」

津島さんが立ち上がった。

用意？

「鳥の羽が必要ね。拾いに行くわよ！」

落ちてるのを拾うんかい！

そんなこんなで試行錯誤を繰り返す。

一月ほど経つころには、ようやく多少アクセス数が増えてきた。

配信中のコメントとかもポツポツと増え始めている。

しかし、そのコメントの内容は……。

《ヨハネたんペロペロ》

《今日も可愛い》

《厨二少女キター》

なんか、想定してるのとは違うような。

「ふっふっふっ。とうとう大衆がこの墮天使ヨハネを認めだしたようね」

まあ、津島さんが喜んでるからいいか。

あ、そうだ。

「ねえ」

「なあに？ 祐二くん」

「ツイッターも連動してやってみない？」

「ツイッター？」

「そう。日々の情報発信だよ。似たような趣味の人とつながりができるかもしれないし。ツイッター、やったことある？」

「ううん。ないわ」

「それじゃ、教えてあげるよ」

俺はドヤ顔になっていたのだと思う。

津島さんにいろいろと教えられることが嬉しかったのだ。

※

それからしばらく経って。

俺は唐突に、生活指導室に呼び出された。

最近は外で儀式とかしていないのに、いったいなんだろう。そう思いながら、ドアを開ける。

するとそこには、谷口先生と。

津島さんの母親がいた。

「こんにちわ」

「えと……こんにちわ」

俺が曖昧に頭を下げると、谷口先生が怒鳴りだした。

「こらー！ 大人に対してどういう態度だ！」

「先生、そんなに怒らないであげてください」

津島さんのお母さんが先生をたしなめる。

「それよりも、今日はちよつと、娘のことで話があるの」

「話……ですか」

いやな予感がした。

俺の頭の中で、初めて会ったときの、お母さんの表情が思い浮かんだ。

あの、どこことなく翳った微妙な表情。

「ええ。話というのは、あなたが、うちの娘と最近、部屋でやっていることについてです」

やっぱり。

そうくると思った。

俺は舌打ちしそうになったが、必死でそれをこらえる。

「話し声が下の部屋まで漏れていました。儀式がどうか、悪魔だとか、墮天使だとか……。学校でも、そういうことをたびたび言っているようですよ」

後を受けるように、谷口先生が口を開く。

「最近は校内でおかしなことをしないようになったと思つて安心していたんだがな。場所を変えたただけか。がっかりしたよ」

俺は、返す言葉が出てこなかった。

先生が続けた。

「先生もな、若い頃はサブカルチャーに夢中になった。ジャズ喫茶に通いつめたし、マガジンだつて読んでた。だから、子供の趣味を全否定するつもりはない。だがな、呪いだの悪魔だのといっているのは、少し違うだろ。気味が悪いし、宗教的だ。何か、変なものに影響を受けているんじゃないのか？」

変なものつて何だよ。

どこからどこまでが健全なサブカルで、どこからが健全じゃないサブカルなんだよ。

俺は唇をかんだ。

「いいか。行き過ぎたサブカルはな、カルトになるんだ。そのうち、おかしな事件に巻き

込まれたらどうなる？ お前たちは子供だ。世間知らずなんだ」

まただ。

以前と同じ単語。

世間知らず。

「ね。教えて。部屋で何をやっているの？ おかしなことにハマってない？」

「別に……。何も」

「何もってことはないだろう？」

谷口先生が、諭すように問いかけた。

「変なことをしてるわけじゃ、ないです」

俺は、淡々とつぶやいた。

「ただその。動画配信を、しているだけで」

「動画配信？」

「ええ。クラスにも、やってる奴たまにいます。面白いこととして、録画とか中継とかして。ネットに流すんです。別に犯罪じゃないし、宗教的なことでもありません。津島さんは、ただ、その。天使とか、悪魔とか。そういう、かっこいい単語が好きなだけで」

俺の言葉に、谷口先生の表情が変わった。

彼は、ゆっくりと言った。

「かつこいい単語、か。少し安心したよ」

「え？」

「いや。少し、お前のことを誤解していた。本気でそういうのにハマっているのかと思っただ。かつこいい単語に酔っているだけだという自覚があるのなら、それでいい。思っただより、大人なようだ」

酔っているだけ……。

「なあ。その、動画配信とかいうのは、お前が教えたんだな？」

「ええ、まあ……」

「そうか」

谷口先生は、目を閉じて頷いた。

そして、津島さんのお母さんのほうを向いて、言った。

「とりあえず、彼には、私のほうが釘を刺します。娘さんについては、後でじっくりとしたカウンセリングをしましょう」

カウンセリング？

妙な単語に驚いていると、谷口先生が俺に言った。

「頼む。しばらくでいい。津島善子とは、距離をとってくれ」

「え、いや、そんな……」

「どうか、お願いします……」

津島さんのお母さんが、深々と頭を下げた。

ぼたり、と、水滴が落ちた。

涙だった。

清潔そうなストッキングに、こぼれた涙が染みを作った。

俺は、どうすればいいのかわからなかった。

曖昧な表情をして、そして。

最終的に、頷いてしまった。

※

生活指導室を出ると、もう外は薄暗くなっていた。

宵闇と夕闇がほのかに混じる薄明の時間。

マジック・アワード。

いかにも津島さんが好みそうな時間帯だ。

そんなことを考えていたら、校門のそばにいた人影が手を上げたので驚いた。

「我が眷属よ、待ちわびた！」

「びっくりした……」

俺は胸をなでおろした。

人影は津島さんだった。

「ふふふ。墮天使ヨハネは神出鬼没なの」

「待っててくれたんだね」

「うん。まあね。急に呼び出されてたからびつくりしたわ。どうしたの？ 何か怒られるなら、私も一緒だと思ったのに。もしかして、祐二くん、一人でなんかやらかしたのかしら？」

にひひ、と、悪戯っぽく津島さんが笑う。

まだ、何も知らないんだな。

さつきまで、君の母親に会っていたんだよ、俺。

俺は、皮肉な、悲しい気持ちになった。

「まあ、その。なんでもないよ」

俺はそう言って、すたすたと歩き出した。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよお」

俺の後ろを、チヨコチヨコと津島さんがついてくる。

そういえば、こうやって一緒に帰るのが当たり前になっっていた。

「不思議な時間帯ね」

津島さんがどこか澄ました声で空を見上げる。

「夕焼け空が闇に飲み込まれていって、だんだん暗くなってくる。だけど、完全な闇というわけでもない。どこか蒼みがあったこの黒。魔法のひとつでも使えそう」

俺は、胸が震えそうになった。

ついさつき、俺が空を見て感じたことと同じだったからだ。

こんなにも、俺と津島さんの波動は、ぴったりと重なっている。

俺は泣きそうになった。

俺は、つぶやいた。

「マジック・アワーだよ」

「なに、それ」

「こういう時間帯を、そう呼ぶときがあるんだ」

「マジック……魔法……くふふ、ぴったりね」

いかにも嬉しそうに、津島さんがつぶやく。

俺は。

ぴたつと、足を止めた。

「どうしたの？」

津島さんが問いかける。

「もう、魔法の時間は終わりだ」

「へ？」

「終わり。マジック・アワーって、すごく短いんだ。それが終わっちゃったよ」

俺は、うつむいた。

もう涙がこぼれそうだったからだ。

それを隠したかった。

「明日から、もう一緒に帰らない。ごめん」

そう言つて、駆け出した。

※

背中に投げかけられる津島さんの声を無視して、家に帰った。

薄明の時間は終わり、深い夜が訪れていた。

俺はベッドに寝転び、自分の行為を反芻した。

そして歯軋りした。

俺の選択は正しかったのか？

わからなかった。

ただ、津島さんの顔を見たとき、俺の脳裏に、彼女のお母さんの姿が浮かんだ。

お母さんのストッキングを濡らした、涙が浮かんだ。

その染みに含まれた、深い悲しみを想ってしまったのだ。

俺は、引き裂かれそうだった。

俺は、津島さんのことを大切に思っている。

たぶん彼女のことが好きだ。

でも、このままで良いとも思えない。

このまま、津島さんが大人になったら、彼女自身が困ってしまうような気がする。

谷口先生の言っていることは、腹が立つが、もつともな部分もある。

いくら見下されようが、俺たちが、世間知らずな子供であることも事実だ。

それに、津島さんのお母さん。

いろいろな誤解があるにせよ、娘のことを想っている、心配していることは事実なんだ。

あの涙が、それを証明している。

「ああああああああ!!!」

俺は大声を張り上げた。

そんな大声を上げることは初めてだった。

もしかしたら、下の階で家族が驚いているかもしれない。

だが知ったことではなかった。

行き場のない怒りが、俺の体をぶっ壊しそうだった。

いや、壊れてしまった。

俺と津島さんの、小さな完璧な世界は。

あっけなく壊れてしまったのだ。

俺は窓を開けた。

冷たい風が、部屋の中に吹いた。

(L i v i n g I n T h e M a g i c W o r l

d ①

結局あれこれと悩んでいるとほとんど眠れないまま朝を迎えた。

学校に行かないわけにはいけないので、もそもそと朝食を食い、制服に着替えた。朝の道をとぼとぼと歩いてみると、津島さんが立っていた。

「止まりなさい」

いかにも不機嫌そうな声。

よく見ると、目の下にクマができている。

彼女も眠れなかったのだろうか。

明らかに俺のせいだ。

だが、俺はあえてそっけない声を出した。

「何？」

「それはこっちの台詞。いったい昨日のは何なの？」

「とどうと？」

「もう一緒に帰らないって」

「そのまんまの意味だよ」

意識して、淡々と語る。

感情を表に出してはならない。

感情を表に出すと、俺の本当の気持ち津島さんにバレてしまう。

「もういいだろ？ それじゃ……ぶぎつ」

横を通り抜けようとしたら首根っこをつかまれた。

「な、なにするんだよ！ 息が詰まるだろうが！」

「あ。やつといつもどおりに戻った」

「はっ！ しまった！」

ついつい感情を荒げてしまった。

俺は深呼吸して、感情を押し殺す。

「と、とにかく。俺は気がついたんだよ。あんな儀式ごっこなんかには意味がないってね。ただそれだけだから」

「祐二くん、それ、本気で言ってる？」

「ああ。本気だよ」

「本気の本気？」

「本気の本気だ」

「そう……。わかったわ」

あれ？

意外に聞き分けがいいな。

こういう時、もつとごねるかと思つてたんだが。

わかつてくれたなら、それに越したことはない。

俺はそれ以上何も言わず、歩き出した。

背中には、津島さんの視線を感じてはいたけれど、後ろをついて来ている訳ではないみたいだ。

途中で一度だけ振り返つてたら、同じ場所に立ったまま、じつと俺をにらんでいた。

……遅刻するぞ？

※

ぼんやりとした頭で授業を受けた。

先生の言葉の内容がほとんど頭に入つてこない。

まあ、もともとあまり真剣に授業を受けるタイプじゃないけど。

俺は板書をするふりをしながら、ずっと津島さんのことを考えていた。

津島さんがはまっている、魔術とか、厨二的なこととか、そういうの。

俺は、別に信じてはいない。

そもそも、津島さんが可愛かったから、受け入れたようなものだし。

でも、二人で一緒に遊ぶようになって、なんやかんやわいわいとやって、

すっげー楽しかった。

普通にゲーセンとかで遊ぶよりもずっと楽しかった。

普通の退屈だけど平和でそこそこ満たされた生活とは、少し違う世界へつれていく
れるような。

なんかそんな感じ。

谷口先生は「怪しげな妄想だ」って一蹴したけど、俺はそこまで否定したくない。
本気で信じたりはしないけど、魔術とか、あつたらいいじゃんって思い始めてる。

でも、このままの状態を続けてたら、津島さんはたぶん、不幸になる。

先生には怒られ続けるし、何よりも、お母さんとの仲がこじれてしまうだろう。

それは、良くないことだと思う。

津島さんのお母さん。

あの優しそうでまじめそうなお母さんをこれ以上困らせたくはない。

……どうすりゃいいんだろう。

悩んでいるうちに終業のチャイムが鳴った。

おう、いつもなら長すぎると感じる授業が一瞬だったぜ。

俺は首を鳴らしながら、教室の扉を開ける。

するとそこに津島さんがいた……変な格好で。

「ちよっ。おま。なにやってる」

「我が眷族にかけられた呪いを解きに來たの」

「の、呪い？」

「なんですか、それ。」

「ってか、本当にその格好、何？」

津島さんは、頭に（たぶん先日一緒に拾った）カラスの羽を挿し、制服の上からボンチヨのようなものをかぶっている。

ヨーロッパのジプシーが着ているような雰囲気的民族調のものだ。

そして、靴は学生靴ではなく、皮の編み上げのブーツ。

手には、蠟燭を持っている。

「やばい。」

「完全に怪しい人だ。」

当然のごとく、廊下を歩いている生徒たちや教室のクラスメートから好奇の視線が。

俺はあわてて津島さんの手を引き、屋上へと連れ出す。

津島さんは抵抗せず素直についてきた。

それどころか、俺の手を強く握り返して、どこか上機嫌だ。何なんだまったく。

屋上の扉を開けると、高層部特有の強い風が吹いた。

風に向かいポーズを決めた津島さんが「来たれ、墮天の疾風っ！」とか言っている。自分がこの風を引き起こしているつもりなのだろうか。

俺は頭をかいた。

馬鹿なんだけど、可愛い。

ちくしょうめ。

「なんなんだよ、呪いって?」

「よく訊いてくれたわね!」

ばさあつとポンチョの袖をめくり上げて津島さんが答える。

「祐二くん。あなた、昨日から様子がおかしいわ。自分では気がついていないみたいだけれど、呪いによって精神干渉を起こされているみたいよ」

あゝ。そうきたか。俺は額を押さえた。

「これはきつと、この墮天使ヨハネを追って天界からやってきた刺客の仕業ね。私の大切な眷属を洗脳して、困らせようとしているのに違いないわ。祐二くん、呪いを解いてあげるから、そこに座りなさい」

言いながら、手に持っていた蠟燭に火をともしようとすると、コイツ、またそんなことを！

あれだけ、危ないから火は使うなと怒られてたのに！
ライターの火をつけるのをやめさせなきや。

俺はあわてて、津島さんの体を羽交い絞めにした。

「ゆ、ゆ、ゆゆゆ、祐二くん。ち、ちか、近いいいい」

津島さんが顔を真っ赤にしてわたわたする。

ちよ、動かないで。

あ、危ないから。

「津島さん、動かないで」

「ででで、でも……」

「ちよつと、話を聞いて」

「は、話？」

「うん」

「だ、大事な話かしら？」

「もちろん」

「(っ)、こんな、抱きしめて伝えたい大事な話……) わ、わ、わかつたわ。と、特別に聞

「いてあげるから、い、言いなさい」

なぜか急に津島さんが、観念するように抵抗をやめた。

ついでに、顔がすげー赤い。

どうしたんだ？

まあいや、とにかく、言うべきことを伝えなきや。

俺は諭すように言った。

「火はだめだよ、津島さん。先生に怒られちゃう」

「へ？ 先生？」

拍子抜けしたような声。

そして、見る見るうちに津島さんの表情が険しくなった。

しかし、ここで止めるわけにはいかない。

きついううただけど、ちゃんと言わなきや。

「ポンチョとかカラスの羽とかはまだしも、ライターは学校に持ってきちゃだめだよ」

「か、カラスの羽じゃないし。これ、漆黒の天使の羽だし！」

「この間、公園で一緒に拾ったじゃん……」

「祐二くん、き、記憶まで操作されているのね!？」

「いやいや、事実だから。津島さん、ゴミ箱漁ってるカラスに近づこうとして威嚇されて

ビビッてたでしょうが」

「それは偽りの記憶!!」

「偽りなんかじゃないよ。ねえ、津島さん。ちゃんと話を聞いて。二人で一緒にやったことまで、出来事を改ざんしなくてもいいでしょ?」

「改ざん……」

「そうだよ。俺と一緒に公園に行つて、カラスの羽を拾ってきたのは事実でしょ? その羽を天使の羽だつて言つて遊ぶのはかまわないけど、本当はカラスの羽だつてことは、ちゃんと認識しなきゃ……」

「……………」

ずっと津島さんが、俺の腕の中から離れた。

「もう、いい」

そうつぶやくと津島さんが右手を振り上げた。

「もう、いい! 祐二くんの馬鹿!!」

「あいたつ!」

俺のおでこに、津島さんが投げたライターがヒット。

くそつ。力いっぱい投げやがって。

角が当たったからすげー痛い。

うずくまってる間に、津島さんは走って行ってしまった。

「交渉、決裂かあ」

俺はおでこを撫でながら一人ごちる。

ひりひりするぜ。

落ちていたライターを拾う。

さつきまで津島さんが握っていたからだろうか。

その無機質なプラスチックの物体は、ほんのり暖かく感じられた。

さて、これからどうしたもんかねえ。

そのとき、屋上の扉が開いた。

津島さんが戻ってきたのか？

期待をこめて振り返ると、生活指導の谷口だった。

「騒がしいと思って来てみたら、またお前か」

「あ、いや、その」

「手に持ってるのは何だ？」

やべ。

これ、詰んだかも。

その日、隠れてタバコを吸っていたわけではないことを釈明するのに小一時間消費し

た。
(続く)